月見集

全

863
159

国立国会図書館　タイトル『月見集』　請求記号 863-159

ガラス使用

863-157

序

四海靡きて　天地ひろき御代の
八十宮のおほせ蔭に
うるはしき　まそかゞみ
新玉の　春の月　花の雪
心よりなりいまも　仲麿の机上の句を
積まれし　聖代の貢物の如し　今も
君が世に　ふる言の葉の

甘きんをすこやかに新年の春
を祝ふ人々は四海波穏の春
をかりのやどに社徒おもふ師の恵
助をうけ給はる事数年遠ふらの
外に栄人を我初ふ事を
抽きて言を述る

平安　門人　中山茂雪

山城

時を得て松を書木に福寿の千
歳経て天に昇るものつるの杜蓼
一本の梅室
色を見り暮秋芳英
巴を先に花並べまし琴亭
報謝頂ふ声も沙る寄念仏風光
義を以法楽にて月日多黙郎
末年の寿命一日所むも里梅通

岱年
草陽
道機
無名
寥々
南徳
亀洞
杜鶯

祭魚
禾明
篤明
朗風
仙歩
豊見
丈翠
芹舎

国立国会図書館　タイトル『月見集』　請求記号 863-159
ガラス使用

あ衣ゝる所る秋高や加茂の森　九起
たゝ美ゝ山ひゝ輝ゝ行ゝ村　松雨
暮むゝの森ゝの葉ゝ色ゝるのつゆ　東樹
昇日の車ゝすゝむゝや門の新　暁雨
つ徒宗と山ゝ智吉るの幟れ　加ゝち
折とれぬ宮百ゝの つゝ哉　春亭
除ゝむゝ むの笑ゝや福寿草　石外
何を時おとゝ隠ゝ家の秋川原　也然

ゝめ作ゝや菜田の多ゝ中記法　乙雅
ちる梅の車ゝ条の ゝ ゝ　重恭
元日や山の詞に杖ゝ ゝ　世外
急る百ゝ人の車ゝ如ゝ彩　舟川
奥ゝ ゝ ゝ失ゝや蕾かゆ　烏白
さゝれの隠ゝ知れすゝの花　魯雄
茂ゝあゝ書ゝ行ゝ梅の色　如柳
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ　岳鳳

さまて、勢ゝも思ふ江の霧　成之
雲のつゝめ霧ゝたつやゆふ暮　仙菓
大日枝ハ深ゝ岩田ゝ分すゝ　蒼雪
夏元ゝ秋の時雨ゝて雲ハ晴め　虚真
散もゝゝぬかるに焼る雲の川　方舉
茶焼ゝを一服たゝ小松原　可厚
雪解やゝ白ゝ氣水くるゝ　月菊
竹橋を渡るゝに拾ふ柳葉　虬朶

有節

れの菊ゝ古歌詠
ゝれゝゝ雲雀の揚ゝる春　仙菓
彩雲の家ゝ結ゝ文ゝ時　虚真
菓の出来ふ西の山もゝ　茂節
惟ゝみのゝめつゝ雲のゝ文て　蒼雪
雨に降ゝのゝつむ菊の野　曲淵
ゝゝ雨出れ元ゝの雲ゝ　菓

陽立の釜年氏名陽させる　節
旧度者も辞宜の月ふる人の中　茂
うつる夕はは屋おみ〜ちく　眞
陽処年れは風のそあ〜かゑ捷　淵
磨月をれいあ〜ゝ山る　雪
春く度す船新年月のゆうう　節
ゑ〜年ちるは萩のめり釜　巣
ちの時の樊ゝ〜もそ〜ゑく　眞

向ひ〜おゝ〜ゝきゝふ産まく　茂
ゑ〜ふおゝ年敷れ馬像く　雪
窓ふ年前の角ゝ前ゝ　淵

大和

行を入て服弱すゝ市乃鮫　芳吾
茅の馬や仕者の筆る年刻内計　芳屋
赤ゝ〜ゝあはゝの〜一くまり　不二雄
枝村ゝ岡ゝ〜ゝれゝめのも　墨居

国立国会図書館　タイトル『月見集』　請求記号 863-159
ガラス使用

おのれ木にうるまゐるもろ弘　里口
蓮華の松や一百よゐるゑ月　河内 稲海

摂津

つもりもれぬるまるする木のあ弘　鳥尤
城掃て居るむりろや萩のも　素屋
おせの松とう光ろる踊弘　杜鴻
木ろ下やあるまこ物松のこ　瑚竹
ゆれ合て蜂よ先分る女郎も　稲處

大風巾の吹よ逆らふ弘ろ弘　乙鶯
所ともする弼立住のこる時竈弘　松隣
をとろうるや速の一人もを寄て戻る　五韻
夕霧の宮れて居るもを　月桂
きつろうるすろも堪ものろ時ろ　萬麦
きろ扇子よね埃立や交をつ　柳守
ろろてものろ人や居るの私　一東
ろろいすや逆先吸れて写香す　國彦

ほとゝぎす聞てまつ夜の水　太乙
見てまつ陰くらき月の出る丘　曲阜
日たかうへすゝ雲のまより顕　藤涯
さす月光うへすや柿とそ　米女
陰火を雷のむかつたる　憂里
陰うきつゝ作りて虫のうく　草居
世をうき成て明るすゝ形　都春

伊賀

杉花のそれ交をゝ霧ふり変　遠水
ゆうゝ来てぬる菊の味ふ新橋ル　養瓜
尺る人もあるよ形褐の梅年年　丁水
菊のもゝ百と嵐を恒一重　二仙
時天ふをを反山のかゝ形　若阜
笑くるむいろ〳〵や雑木山　玉舟
来ふゝや思ふ白るを蕭小詩　皮紀
さ紀初てなのの月ふ光の梅　金杖

ふるくのたゝりたるていしのもと　二文

雪の庭をまつ白やうかぶらと　養瓜

たちてさすねの風るる冬風　曲淵

宮の戸をつゝる神木しるとあるく　有節

ちる紅葉の原に梅陳を伝ふ　瓜

宮冬を富て金沢る里のゝ　淵

いとゝ高るへよ雪の立ち度　節

野海をあるる松原を宮出り　瓜

大和ゝ多ゝもとゝ乃知己　閑

ちるよ雪の前の月を高の雪ゝ　節

居ものかめ奴ふしとむかしの居　瓜

文の雪て音もなくよ紅葉院　淵

二日のゝ雪のゝ奴ゝ山ゝら　節

冷ゝあて鶴る寒処の東ゝ　瓜

衣のすゝもむゝふつ白ゝ　淵

くゝ腐頭ふきを補めて能まねて　節

おゝ大世のうれぬふ花　凡

うれ生もものゝうよ竹ゝとく　淵

のかゝりをうける巣のこゝえ　節

おゝれる義人逮の狗あい　凡

うて未年猿のうたるゝいゝの　淵

うゝの八角を孫架畏れぬ　節

年上てのゝゝ佐のうゝ　凡

青空のまゝゝ年ゝはるゝ　淵

かゝるんと九淵のたてる蓋百　節

ゝすれゝる空をはゝて鳴る　凡

ゝふゝく蛾の白くあるを　淵

世てゝ医者のうゝまつはれゝ　節

口のれゝ鶏の水井を雨め　凡

ゝ言ゝ水使に秋ゝ鶏帰　淵

杉年芭蕉の破ゝゝれ音　節

国立国会図書館　タイトル『月見集』　請求記号 863-159
ガラス使用

もてなの樹ふる庭無坊　凡
夢の名知れる神の不拝し　淵
古ひ世をのての京やう　節
おろす宮雁は陽のいろ舟　凡
やふ木もれもの星うの引渡り　淵
麦の夏へうゑるゑ凡　節

伊勢

義名抄　先立ものさうし　桐一
白指ふ夏さ北小ゑう外義　青松
凡のゑは月ふ思ひや衣の梅　翠雲
引狩のあもかのうち秋の宮　虚舟
沖ふ高いふうふうふきく煙拂　松圃
ち川夫や高北山ふの月五升　米牛
笠ぬれて宗の衣句ふ指ふを　舟横
竹つゑ乃踏てうすや元の庫　文畝

折りて中長うぬく梅の枝　昌風

梅初や育に手せしも艶　英一

消残の雪蜘手戻る蛍かな　雀渚

奥の院知てもとしおもひ　時兆

大丹や仙年付まてきりく見　智民

柴の花や折た殺て枝梅除　米山

元日に汲ひそめけり硯の雫　煮西

ちらを過ふて雪すや涼く壹　卧雲

もちひと一音におちるまて雀　徐水

小原もある庭さ紅や蕊ま毛　舟糸

庭ちきの中て月に牧きく　春川

海人と蛭結合羽や蛍のう　不遷

梅梅年　彫ふてうすや柏猫　山沼

柴とうふ去のぬくやけさの麦　水月

小ちる日や梅と服のつ梅俗　木下

ちるさまるを屑いれくあり麦の雪　示雪

折る迄の乗ゝ出て梅の花　佳交
ゝゝ咲て乗てもとゝ夕おちて　いそか
梅咲て又知己の来りけり　懐扇
山霞ふて吹くゝふ里やゝめの志　番麦
川ゝの梅ふさゝゝ風ふふ　麦子
ゝめ咲一面さめふえて一張　立蕎
梅一木有て来れゝ酒ゝ酒ゝ　香甫
酒の梅きゝ切れまゝ酒ゝ　雅琴

庭前咲ゝ来て一段のちゝ弘　子遷
三日ゝゝ孫ゝて来す梅の光　一圭
雪の朝ゝゝゝれ沈丈　春蕊
力ゝゝ月ゝ入ゝゝれ尾も　若葉
庵くゝゝ分雪ゝ法ゝ猫の花　春魚
山畑や日年向く中の雪一文　呉居
梅ゝ長を踏ゝ志梅のハゝゝ　延文
尺宮て出ゝゝゝゝ梅　花重

竹もろこしにもまぬかれぬあやうの月　鷲風

うのもやすらと三又さいつ遠　琴松

乳ばなくて振りまうめもも　菊花

雪雲の果もちりけ尾ゑ弘　月梅

たるゑもや汐ゑ押ゑ岸の舟　有斐

はつ撥見る服ゑ為て変まう　倨遊

魯ちゑのむちとふゑ水仙も　岩舟

夏和ゑとこゆる雪ゆり桃の花　震松

うくひすや自性に子の出頃ぬ　池蛙

木ゑ下の井ゑ波ゑて更まう　春道

東風ゑ消て小ゑ子の池　對鷗

くもりてるはのゑて雨ゑ紅　静池

鶯の鶯の新ゑ花の宿　樹六

仕ゑゑ雪清し果ゑ菓の色　山友

伊ゑれて行ゑ梅乃花　雪篇

松風や月の音波ゑてふく　超波雄

水際年却るのゆくや秋日和　震汀
そそろうちつてこまてゝ釣のもと　柳塢
袖垣年羽折つるもて橋本に　寒翠
橋為八宗一さいの坂恢々家　蕉面
寒毎年除野戸友のうく　花直
花もまたて明るう松の梅　海藻
孫に見せつゝ尾のうんに　墨清

尾張

多い秋の出けめるを常の事　而后
とゝくして名れ出まよるもに　梅裡
ゝ名の雪や波をうつ也　秋の下　一清
当夏人来て函戸明るを若のも　三声
ゝ行さ紙保つ力や名屋も　鵬屋
人変ゝ雪を堤る秋明られ　旭嶂
江のうくの月秋を称る寄さに　辞雨
一樊ゝ山の雪ひや明きるる　黄山

菊うゑてよる霜のいやをかの月　龍松
木がらしやうつり動る神垣　篤志
はら〳〵今ぞ海りてする音うき　靜赤
風や川戸年の紀茅の山　擔川
時すてて出る月のうすき　芋江
秋とうの片倚つや蕎うり　路夕
陰うす晴うるあやものえ　春志
雲うたのところ〳〵や雪乃系　安朴

川猪や民人まれまとて誘ひ等　半宕
木の末まうまる面はちく雲哉　芳壹
所あひる角の打うんや梅の系　綺川
ふうとあるの無打うの月　桃里
仮まあく切て只時や炭たう　桂李
角乃竹の波より低ふ雲弘　沉牛
方とちうくよれとうとの雁　可仙
柿庵や誂の高音よ時いうた　李裳

[illegible]　　應知
[illegible]　　桃秀
[illegible]　　蓬委
[illegible]　　芸里
[illegible]　　賀竹
[illegible]　　芦十
[illegible]　　不足
[illegible]　　有橋

[illegible]　　李曠
[illegible]　　思父
[illegible]　　爲朝
[illegible]　　市雪
[illegible]　　士雀
[illegible]　　揚雲
[illegible]　　求可
[illegible]　　父之

対ありふれぬ麦の色哉　月底

三河

兵平ゐるはめものゐるや春の暮　麈言

雪のうちにて兵船の帰る　流芝

山蔭もいと寂寞てのぶれ　蓬宇

西東に新れ多く　打次ぐ　遠江　爲谷

雷鳴一数声風吹灯のともるる　杜水

ゐるとも打ゆて輪ゐむ柳哉　甲斐　弥哉

部あるゐるゐるゐるの柏蔵　可轉

又ゐるゐ待ゐるゐるゐるゐ春のゐれ　通志

砂ゐるゐて波のゐるゐるゐ秋のゐ　為一

沈れゐ蔵ゐ一株ゐゐすゐゐ　登波

春平ゐゐゐゐのゐゐゐゐ　道号

風揺ゐれ河ゐゐゐ蔵の蔵　彦貫

武蔵

仮橋の住ゐゐゐゐ　一具

物のかゝり消て面影ばかり月花
見てと只名残し哀れ深の面　伯遠
あきらんかり遠も来て物　遅流
衛門と清水の流れの石の丈　百丈
日ぶかのふるい餌を釣る細　薪少
ふれば水鳥あるる日あるを　松付
孫平まで花を留るや花の色　丁知
あもよふ深の小具やあるのを　由芝

義仲忍びてよい象ひらうやこの者　逸淵
拾れ麦ばかりなる林下れ　岳堤
きぬぎぬ仲もあるあの者　見外
菜畑ばかりあるんや日の暮　虔角
ほかもなくまは一すもの色　西馬
人のひらうこ住てるる事　白起
撒まもなのれのこの事　以兄
まう時も人の見まの底の花　堺蕪

仲のそのうゑ拾ひ分るの　南々
つ松や四方表の枝ぶり　奇三

房総

川音の筆にたゝまよ蟲ゑも　如是
うれ淋しうもなるはなはやもにほ　交水

近江

所さうやはるゝほうの後うん　蕙逸
黄金や賤きる本能の身のうゑ　栄友

伐さたあとの小枝やうめのも　砺山
梅つゝ人も咲きの花なる　東蒼
先とれとゆ接投やうす羽打　蹊洲
うゑ木て暗ゝ山ゑ流るる　芦岳
幸抱り懸ゑ小れうゑ庭ゑし　楓下
いうゑ魚ゑ蒙ゑ中ゝ頃　麟和
つ山平蹴ゑ世うすゝひ　花兄
旅人の尺ゑて遠や乘の名　烏邦雄

菫火ともしかねて秋の雨　舊雨

清水や藤棚の下ぬけ来て　楽浪

居酒すゝる居よき居酒屋　旭桐

よくのびて鶴く河原の土手哉　因暁

白魚やとつかもつかぬ市の賑　少年　木雞

財布の底に千句出来ぬ　少年　竹翁

足洗ふ手の届かぬ梅のむ　捻渋

忘れ物思ひ出す時の蛍　因頂

ま[illegible]の跡を[illegible]や行ひあ[illegible]　朴葉

去こうと床几たゝむや梅林　藏六

来るまいと思ひ柴屋の殘梅哉　房光

呼すてゝ五位の尺迄て月の月　箕玉

毎秋ごとに忘れて森の秋の月　寛陽

雪の中のつゝれぬ燈や番所　松月

下ゆるさぬとてもたゝぬ海原　梅月

元なとも少ぬもの家や蛙哉　桃谷

言いのもあとへいはぬを帰る　不尺
出て見れば月まさやかなるそもれば　巴郷
待宵や日くれ降りし雨よりの　素白
おもしろき寺さびしき山なれば　子容
夢ぶかしよもの雨の後ふるる　依麻
とろ舟のすぐや桂の日乃表　杞柳
雲の海の中に浮ぶ月　流翌
まち遅や生垣分けて出そめし　四許

きくの花咲きまさりぬ孫のうち　青岱
いづこ迄ぶらぶらの月　尤外
分のあるうしろすがの御影哉　梅彩
酒むしろ安らかに枇杷の色　且令
花屋敷ぬるるまとすや御の蓮　芋丈

信濃

芋の葉の立のあらたう梅乃も　圭布
秋うきの蔦こぼれむや梅の花　武栗

円ひとつ浮かむ影さへ見ゆる家　青坡
川そへ松の明りや志賀の里　路董
一里ほど来てかえりみし月の影　柳宇
江の底ま深き姿も秋しられ　李明
咲ふよの清き桜もちらりけり　梧芳
芦刈らぬ人も藤波牡丹花　月霞
関原や更て更ゆる月の友　沙鳥
井に流るゝ影のうつるやねぶの花　鳳地

曇らぬやいつもの垣や后乃清ま　桐児
入れまじと尾上にのぼる月の影　酒楽
椎てらす丈にふりまく月のかげ　茂葉
松明き風のいつれや飛とまれ　雪里
こと雲のうちおもてかく富士の山　李山
手本にも足らぬ耕地や時雨鐘　蒼芦
淡海の月より隠れし水鶏　雪裏
様々に帰るさへ見えて栗の花　三都里

物をゝてとう所にて雪の暖めを　　獨礎
ゆゝ段を振りて立やわすれ　　桃居
つゝる帆を見るゝかなめ　　真雄

上野

はつゝとすると月ちすゝ食　　茹中
陸奥乃磨ゝ所にてゝゝゝ　　鹿啓
知らぬ紙ふまくて持ちの写ゝ　　つゝ
知所へ出るは麦まる落ゝ　　一桂

さゝれの時て汐ゝ狩乃去　　下野　未足

陸奥

尺てゝ一ぶ松もけふゝ実はゝ　　一止
大勢てちゝえゝゝゝ次ゝゝ　　江三
脊戸川ふゝ多ゝ写て明の夫　　芳山
山ゝせのふゝ寺紀梅の結ゝ式　　汎乎
ちさ紀に董の世ゝゝ方発　　出羽　御風
ちゝの枝の紙烟ゝゝ写ゝ　　素山

井手の玉水それかとみる　馬三
鳥もまだしらぬ雪のあけぼの　洗耳
うつろふや服を洗ふ乃吉　河暁
それ知る人のかをり花の手　怡々
山路をおもふて時雨打戸哉　桃暁
とりかへて居てもうしろめたし　清梧
春ふる雨の家の笠　雲涯
笠の端よりしたたれてつり乳　東皐

つるかるさうの尺をためすむ　佳風

若狭

きりぎりすはかなのそのやの深草　淑角
うぐひすやめぐりおそせて枝うつり　柏石
板びさしもかりあすかなる　賀昇
よい影平辛若おそすやのあり鉛　水哉

越前

つまの物平まむ事れ　如積

国立国会図書館　タイトル『月見集』　請求記号 863-159
ガラス使用

たそかれてみるかたおもかけ　青牛
ふるとしの雪をぬひけり梅の花　東升
梅の根をめくりて出るこうろぎ　布弧
雨たちすまるもとりしらぬ夜はひかり　如醉
名月をたれかふりむく雲はれ　士羅
明ぬ鶴ゝ芦ぬけすくるこゑ　仁哉

加賀

放生会と梅や塩ゆの湯の面　丹嶺

海や波をちらしてひくもの　豐收
ゆるゝこゝの度のめまつの節まつり　槐洲
風抜てゐるをいとゝまつのそりれ　木圭
うゑる田のちりやまつ春のたのしさ　東雅
ゆとゝふ枕つれい時うとし　斗和
植松の根ゝ中とゝ波のもの　呼亭
月のもゝ月のれいまつ　可道
橋ちとゝうるゝ懸れ　小園

古寺の名井まあり木下やゝ　渓聲
入て見れいとゝまる帳やもれし雫　梧井
星こゝのひまるゆゑ遠の澤も茂　我醒
波百ゝ揺もはさまやむ間　加計
霧るゝ夕を宜所すてあり飛れ　桃下
地を撫て小石ころすつゝめ弘　一甫
ゝ袖のゝ詩のゝくれ来　何笠
時を惜ゝ七ゝ一時帰ゝり　里飯

夏百やゝまれ晴をさむひ　松坡
戸口ゝ清ゝ紀ゝ移の毎　黄年
湖の波毎ねて移る紅弘　立歩
ゝ音のすゝ宗ゝ夏木立　羽丈
時ゝ波の飽き夏尺ゝ　三枝
きつのまや人ゝ新まゝ旅の空　季節
夕立のすゝ百横切るかのれ　篤朗
百ゝて七ゝの三ゝ山けゝのゝ　悠平

仁作
蔦露
素玉
江波
林坡
可由
晴江
震朗

荒裘
小丈
玉精
左龍
岱鳥
方屋
琴賀
我柳

[illegible]　文中
[illegible]　超翠
[illegible]　東揚
[illegible]　柳
[illegible]　拘奚
[illegible]　寫石
[illegible]　柳岳
[illegible]　卓丈
[illegible]　柳壽

[illegible]　大夢
[illegible]　賀水
[illegible]　菅昭

能登

[illegible]　升鳩
[illegible]　淇洲
[illegible]　木璽
[illegible]　半江

国立国会図書館　タイトル『月見集』　請求記号 863-159
ガラス使用

宮殿もやはたそよぐ咲てたすれば　古雁
四季ともなくかるかやの屋やの萩のもと　明尼
所〳〵来て衆のなつかしき秋　文濃
負ふまは稲のうるふまむ夏や月のうち　涼壺
のさらほやの麓まさるもの砂の色　浩氷
日よりさへ入られぬ深き霧　霧暁
ちとはをきぬ五年交て渡る雁　文卿
時ならぬ雪のふる〳〵時の雲　千蔭

日くらしやそよぐ堀る峰の松　古風
野辺やはりのかたり竜　暁雨
大川やはのもとの雲のさかまま　有之
峯入の一組出立まつ白の糸　逸枝
まつ二度の真も海て草のもと　板波
先ひとはの真やの文　衣　梅明
地子おとし拾ものへ蓮のもと　花渓
容易まもられぬまやもと水　然重

名月の威をうる山の高さ　葛山
高さうゝみるのゝたの今井　文洞
山みのまこゝ来るや蔦紅　住暁
芋りの背中ゝ〳〵ゝ魂よう　李旭
木のやゝ紅のうす月の光　紫麦
うゝ紅来る風ゝ都のゝ春田　文暁
乙鳥の名ゝ山ゝ鳴いめう　旭来
梅のゝの西ゝ月のてうん　兎白

ゝ月の蔦ゝ隙ゝ松ゝ人　其犯
ゝゝ月ゝ空ゝ山ゝてのり　梧々
ゝ梅ゝ人のゝ背原　晩穎
ゝ文の入ゝ月ゝの　斎樵
水ゝ水ゝの月ゝゝの　路悠
ゝゝ月毎ゝ人ゝ心地　月價
火のゝゝ一隙ゝゝ　梅村
小道ゝゝ稲ゝのゝ遠　沙雄

波おとの里ずこえて岸の秋　娯遊
巴浦のうらあおぎ　茶丘
いくるのきくにて　素吟
月高て出て月数や菓の花　芳月
降かとも雪いとも花乃雪　奇鳥
うゝ山のけむりやすや白扇　潤松
あえの雪もまれて笠の内　一秀
いと恒高ても見てきぬ　史牧

所りをきるに地でうの而　習之
ねるとおもふ目の前ふる花　梅兄
梅陰ゝ新ゝ来ゝ玉　玄和
桐一葉ともかゝ見ても寒ゝ　長岬
雲ゝぬれ現ゝ月ゝ　東嶠
聖年ゝ見ぬ木ゝ　鳳兮
波おとのちゝ小ゝ　桃夭
木の雪の松ゝ　貴存

海のおとかすかなる　亚渕
木ゝもすゝれねてゝ月後る　佳松

越中

晴るゝとゝる雨もゝ日のゝく　水哉
雪をれの竹窓のゝてふよのゝ　禾汀（晏如更）
ゝのもの幾ゝ折ゝる小ゝる　如静
打ゝ出て見て月垣や梅ゝき　茶屋
雲ゝる中や桑株こゝて田のゝ書　雀坐

もゝて来ゝ所ゝ月後庚辛　晴厓
家ゝのゝ雪ゝ折ゝるをゝる　文哉
ゝ高ゝ者の見ゝ所ゝ雪の雪　里月
名ゝ所ゝ山ゝ高ゝ見ゝ立ゝ舟の中　新甫
帰ゝて見ゝ山ゝ雪ゝ紀ゝ幾ゝ　青阜
川ゝ端ゝ一ゝ休ゝ休ゝ橋ゝ情ゝ　里旭
山ゝ見ゝ出ゝ鷹ゝ山ゝ夷ゝ水　月守
宗旨ゝ者ゝ法ゝ夷ゝ　苍精

国立国会図書館　タイトル『月見集』　請求記号 863-159
ガラス使用

傍まゐあくしぬ[illegible]　卜少
山茶もや[illegible]　廉夫
[illegible]　恕兮
[illegible]　文友
[illegible]　素人
[illegible]　蘭圃
[illegible]　梅人
[illegible]　子道

[illegible]　松兮
[illegible]　嵐汐
松山や仙台[illegible]　十亭
せもの[illegible]　笛堂
[illegible]　逸江

越后

[illegible]　春室
[illegible]　乙良

国立国会図書館　タイトル『月見集』　請求記号 863-159
ガラス使用

梅さえなかなかし谷の一日路　春成

新法しとくさへしてを福まて　李年

はらしは宵咲静くものいろ　以逸

一里余りと不添枝れてはるのみち　曹村

斐の神やきよみ付ぬおしの処　一花

とれかとこつもるとこそ夜の雪　花朝

見て咲れは家々は添ふ鶴の来　青湖

人もいさ為も東しまつらす　應居

花水仙やものの名のうつり　碩宇

よれかとる風あゐ花の木下かけ　清水

雉の声はえて隣ありはるの雪　良眠

またゆるつ田をまたまとめの色　鷺眠

夕くれの山ゆれや似あの風　九室

舟出しさえてこそ殊らとんとむ　竹司

啄木鳥の音まえもしぬまつ桜　好靜

宝きまなや信郭されと山乃陰　茶山

国立国会図書館　タイトル『月見集』 請求記号 863-159

ガラス使用

[illegible]　ちゝら

佐渡

[illegible]　文仙

[illegible]　為言

丹波

仮家[illegible]投上黄の[illegible]　九蕉

[illegible]　湧泉

[illegible]　南涯

[illegible]の[illegible]　九價

[illegible]の[illegible]　野卯

丹后

松[illegible]の[illegible]　喜節

但馬

[illegible]　無着

[illegible]　洞中

[illegible]　梅二

[illegible]　一雨

茶摘のとよみて通るれの長　松宇
山路の雨をたづねかやの花　花川
郭の窓まるまもしろ紫弘　古林
月れて寒る浦く又はつるの波　梅葉
人の世乃たる旅をあるロ年　古林
木賀寒るの春の柳の白　忠雄
水鳥の山の越し切の芦の角　古林
耳ぶきる春と思ふ初鶯　〃

病ひの床ふるく
桜ちと咲れハ芽をあよ桜木弘　仙也
長ふを
黄乃紅ひさく風よのれるう　乾女

伯著

荒ひとつ高ひ峰ひ大夢
義よりあ年るうく海弘　杜陵
咲ものの花ひ城つる桔梗哉　景太
投あくる栖のひとの秋の白　登山
公角ひ砂をおの服のくろ　白亀

時雨ふる砂のうへや時ちがう　一都
月澄をいきまの姿や月の雪　梅汲
山伺の枝ぬけて磨ぬけのもの　井蛙
雪をれの幸先も知るなるべし　鳴孤
四まのうて帯かと掛すのしめ　百年　出雲
うれすうる紙屋ぬうや魂祭　百齢
海山ぬうるうりやかるまれ　花井
川石ぬうられて時くひれ　抱甕

一村平野ある山ぬや梅のも　蘭和
ねてうあ一戸の内おや時雨　菫月　石見
波おとの松ぬひまそのうく　芦川
川紙ぬ枝のもつる柳ぬ　郊柳
ぬのくとうつ雑巾や菱のも　里水
ぬのうる脂もぬはの匂ひ哉　梅充
枝先の黄ぬもとる庭ぬな　馬角

播磨西備

国立国会図書館　タイトル『月見集』　請求記号 863-159

ガラス使用

菊の百ゑ咲ひろ牡丹哉　播磨　史隆
月ゆゑ〻〻〻〻る木てゝ初櫻　塩梅
春ひて見れいは形人通り　梅霞
まゝ〻〻すむやゝるねの形櫻　玉阿
笑ひめて強ひ山吹き哉　備前　布國
雀ゝも見ゝ知て行のも　涼呼
梅よもゝ木の〻〻への雪ゝ　沙年
ゝゝもゝゝ海年ゝ長の鶴よ　備中　雲窠

ゝ生ひて春ゝ花ゝ梅よ垣　栗坡
仏ゝ人の笑ひて庚ゝ〻ゝ　春耕
犬の長ゝ殺ゝ猪ゝ木ゝ乃雪　壽亭
浪ゝゝ伐ゝゝ花ゝ　柳外
蛙ゝ仏ゝのくゝゝゝゝ　蹠梅
蛇ひゝゝゝゝ赤ゝ　嫩緑
峯ゝゝ形の羽ゝ鶯の音　東嶺
ゝ春ゝて出ゝ行初子　香雨

安藝

時雨を拾ひ入て桔梗も　甘言
酒もあるなるなるかなるかつる　程喜
家てもてつまりかたの雪　木屋
名の高て嵯峨を流すやまの水　成湖
俚謡て流るとゆふ深き　古徑
波打ちて変も志れすなの出　亀遊
うろ来て廻りとるのゆふれなる　一仙

あのふるひ時雨ふる雲は危　朱雀
ゆく先の原とあれはよ汐干ふ　知光女
梅陽恠の明るよ春るや解の加　春海女
きるの義ふ子ふるあ化汐干哉　菫子女
ねんこうはいて芸雪の船　連枝
ゆそなれて見えす谷の雪の哉　我獨
時雨の沿ふ高ふ嶺の雪　眠虎
大空ふ雪ふ思ひ出しの夏　古徑

国立国会図書館　タイトル『月見集』　請求記号 863-159
ガラス使用

遠くまでやうやう咲こしけりこの子　藍水
うたがはや廣千うるものの他　亀齡
なのもれやすうよ殿細流れ　文波
五尾板の鶏ふくゝ夕ゝ　時麥
風すもとこしてもむすの匂ひ　水馬
制札も庚申藤ゝうゝ行くこ　二葉
ゆくさ事や沢田は並ぶ鶏のこ　蘭舟

紀伊

ゆくくくくゝ知るもてゝ発のこ　世外
ゆくあの中も山の賊もこ　月虚
ゆくこるゝ砂ゝこの　奇鳳
さくゝゆくや京牛の山乃ゝ　梅因
こくゝもこる新のゝ京の　南溪

淡路

世の中を陸ふやうこゝ桜　梅亭
松をひゝすゝ沢ゝ梅の　奥樂

国立国会図書館　タイトル『月見集』　請求記号 863-159　ガラス使用

[illegible]

希麟
蒔池
鷗池
茶城
芳之
月處
楓所
樵雨

[illegible]

梅廬
冨草
東蕉
壽山
蓬壺
南園

四國

阿波
萬像

やまとなすすきうゑたれば　左一
こぬすゝ服元高しの声　卷律
立蕣ふ林の月や相の谷　後凋
明せいるかりかりの月　晴呼
帝くと陳の海すむ春なる　夷岳
さく花のくるいなる風は河水　茶蕾
三日このいるの明るくもりなる　楚宮
陳の春のうゝ春の月　讃岐　竹雄

明おもの月のうゝ春の月　化友
原中や松ものの月　扑端
桐ひとむらと春の中　伊豫　鶯居
人見ぬ風物の中　葵笠
黄色や藤おさして春の月　漁翁
探千年彫秋奏て春の月　蘆岬
とゝかと清ゝや百年の春　菊洲
ゝ清ゝの秋ゝ月ゝ　蟾居

夷あれ小竹もゆるし文乃月　秋卜
一ゆゑ面もたてらの方乃多　竹外
多しとつ竹を人行う宮のこね　卜水
雪と有る雪の消るを見よ春家弘　雪湖
くゝゝの人る乃ゆ喜ゆうゝ沙　花雄
明るゝ有を事祖のつゝ弘　如泛
つゝ直す義も先の庭へ子　梅史
橋ゆゝ子ゆゝ先ゆう文衣　二佐 巻佛

坊の子ゆゝ咲つゝて明多　夷村
汲ゝゝの乃て先ゝ妻の色　壷通
木屋ゝる小春ゆう梅未　池回
新所の乃て時遠る新橋弘　素六
日高中小先屋乃ゝ高ゝ幾　文操
知ゝゝ乃時て見新世ねの海　霞柳
仮ゝめ年ゝて海ゝ牡丹幾　二環
文川や春文て人の子ゝ多　楠露

国立国会図書館　タイトル『月見集』　請求記号 863-159
ガラス使用

月湖
泉砂
龙蹟
蔦山
竹雨
裙山

筑前

遊歴

天遊
波同
玄子
佳峯
竹烟
銀岱
孤南
月坡

国立国会図書館　タイトル『月見集』　請求記号 863-159
ガラス使用

はるかぜにうらみすらんやまぎくの　木容
ロてくくかゝりて唯のこめ　桃五
引ゑハ江ゝひゝをうゝ秋の時　閑令
英名の雪ゝて紅葉の傍　百言
二度の霜ゝて結ゝはゝし　勝錦
松葉像の土百ゝ植ゝ植るの弁　如草
風原ゝて紫ゝ菊枝ゝ揚ゝ　石声
菊一茎ゝ色ゝ長ゝ枝ゝ山形ゝ　淡節

るゝて紙ゝ家ゝゝゝ　乙也
あきゝゝゝ松ゝ松ゝ　舉一
数のゝゝゝ紅ゝき　芝水
やゝまゝゝ蹄ゝ愈ゝゝ　秋對
ゝゝのゝゝゝを目ゝゝ神ゝ　吾佛
なゝれのゝゝゝゝゝゝ　抱儀

むらし　新田義貞北軍のとなれる
敦賀のうみに陣所をきづめより
かくるゝのありとうけるゝ弱よりる
蛍もそゝろ〳〵ほふ舟をとゝめ雪路
とゝ程おつゝふ実に来なのすてるあり
みゝ衣をるゝ涙覚ゝ新ゝ濤　有節
拾ひとよき　波乃うい　風　曲淵
寄るの傍りよいさむ穴ゝれく　敦賀　如積

鶯をくむ者のゝすゝるゝ　青牛
おあはるむゝの数稀ひるゝ　福井　布珀
ゝゝわてゝゝゝ家の振うり　三國　如醉
二度芽ふゝ橋未ゝ月の　大聖寺　丹嶺
ゝゝつゝすゝ葉のひゝ弘　豊収
求道ゝ求ぬゝ野原の酔さめて　呼亭
ゝゝ原ぬゝゝ俗ゝ吸　北園
笑ゝ濤ゝ和ゝ因ゝ　東雅

くもり晴れハ海ゝ氣口飽、木圭
ゆき本を人目ゝのゝて立て玉、蜆洲
漁場やまゝのいとまゝ月出、可道
月ゝゝよ牧きゝ猶のゝ遠おれて、斗和
麻のゝめまを以入る海と 吉寄 仁哉
拂拭ゝく橋ゝ貢ゝ戻り鷲 山中 田二
嶺岳のゝなゝみゝ行脚 如草
あのゝころゝ人ゝ多ゝゝる師師ゝ 金沢 悠平

橋よりてゝもゝ京のゝ馬、三津女
茶ゝ雪孤ゝの火ゝ孔ゝ要ゝ、素玉
暮ゝ法ゝゝの俄ゝ、季節
なゝめゝる夫の田面のおゝろく、葛露
打ゝ出ゝ風ゝ孔のふゝる海ゝ、篤朗
小形理ゝ出ゝる路の末ゝ、可由
初ゝ打の袖の艘ゝとゝ、林坡
大原の里ハなゝめゝ手の松ゝ、晴江

弧矢、羽丈、
遠まきの弱の代りに旭のまて、立芳、
くれる時計の月あり立、鹿袋、
川陳のなるき普請にうんたて、我柳、
大角屋のむの早まりる、白玉、
婚姻もすみありて婚るん、北山、
くみも宮の水宮の山乃名、鳥石、
月うけの岳をくん撥す阪阪の毋、柏奚、

奥はうまをしまを和鮏、久草、
雑用に依きえんむお樓元、起翠、
茶室奥ふく引地面あま、東楊、
撥のまをる寿の名あし、奥光、
ゑ服年尺てもつまなく、大夢、
つれなたくの日の陳のうり達、霞朗、
ゆめこのさめれいまとのうま旅、北丈、
雑魚けの稽をおまのう、江波、

いや二ぢ通りなる稲の穂、　琪嵐
秋なれどや沖の百里波留士流て、　玉精
月と共なる新子連なり、　仁作
日ぬめる波ぬしいなる夏暖簾、　雪杖
彩色すれいはやる十間子　巣　花溪
きらくるる家のなるふるいも、　梅明
都のあとと夏のさるれ、　恕堂
うらふれ市ぬはらふ沈もり、　鴈来

やはとるる入る多金の殿、　紫麦
沈り強ふ多ぬの惜よ数ぬ、　葛山
佐ぬす巣の沈ぬ金のつる、　文洞
やふ市の沈ぬ入歌の数ぬ、　梧卿
掘ぬふられ涙の魚ぬし、　佳暁
のみ市ぬ竹扇枕ぬ残り、　其兆
市を振やふいやぬ魚、　李旭
くせぬやぬ桜ぬる矢立、　文暁

まつ海辺にもなる須磨、　兎白
笑ふも極楽にさくらんぼう　七尾
橋ふまずとは海の鳥の毛、　竹塢
愛敬をもはつむ伊勢まで、　淇洲
うつくしくふれぬ見事、　半江
妙義ふたつ稲荷のナニ燈、　樫厓
とまるみるぬすり強立、　古雀
うたたねの夢ひ、　木聖
　　　　　　　　　　　　　　　語氷

弼ゑ強弓ゑむおもの、　涼臺
交まれたたまもの面、　暁雨
ひるをとまくちもの、　文濃
本ゑ行ひくする強弓、　霞暁
ゑ行る第をつてふ宵、　有之
あてのたる行のちの月の秋、　千蔭
このみちをよ嘗へぬ新若麦、　古鳳
しらつゆぬる強ぬすて、　明尼

人もたにうけぬ菓屋の山、龍枝
ひさしくへいこうの高の秀　中居　奇鼎
梅ちるの方うり競ふ梅の香、一秀
糸芝の清又おのむ鮮のるま　輪島　晩籟
火鼠といふ裂をいふ所、露樵
生涯のうるはうるはしき落をとり、沙雄
立文をうるまる紀前の彩、茶丘
弥生を染る鮮ふまるの方、可文

毋よ母摩もおれるまるまら、梅村
綱を手綱をもんうり腸を腸て、路悠
青うら解るまやり正月、素吟
おうてもあるれと梅の才を、梅堂
なるもあるる鶴を抱うるる支、娯遊
うけるる柱の快のひうと、月價
いうんてもるる甘酒乃るる　牛津　習之
ひるんるる月まず紀ふ松原、梅兄

筧をとりまくむらる川柳　武部　貴存

笛の音の澄まる里の春の月　川田　佳松

五月雨なれいきたのあるる宵　芹川　止渕

六條もおもをれたる紀　高岡　花精

ぶりして高き踏の殘　氷見　禾汀

面白くあるく小原る枝柳　如靜

されるるやらはやをあり　茶屋

おもやるる世をもむの咲いそよ　水哉

ひと降あるる一夜の霧つる　青阜

百花いたるとと貴ふ笑連れふ
中月形〳〵懷きんやとてあるる
顏を次きるとふなるまぬ

常をも雁月夜をるるる夜をのて　雁坐

鞠場のおとのるるむ秋乃る　晴涯

菊戈の彫も世〳〵おるおるひ　文哉

たるるるあよ鞠をるるる　新甫

席明年度て廻る燈切る　月守

[illegible]　里旭

[illegible]　里月

行脚　吾佛

右此一巻者去申歳予遊杖於北陸四列
到處晝夜會對嶮之席二百餘日曲淵侍傍
使其驛士次人一韻卒及二百有八嶮是雖為古
格変範更不忍棄雅情因以今載于此云

[illegible]　有節

[illegible]　曲淵

[illegible]　有節

[illegible]　今

[illegible]　曲淵

国立国会図書館　タイトル『月見集』　請求記号 863-159
ガラス使用

能おの門の浦まで
ゆのまろうきを春や屋風雲　有節
くもまてうつるもみ稲の波　仝

加海眺望

霞風の水鏡うつる水と空　曲岡
さよの月の沖より運ふ光り哉　仝
山徑十里人煙稀
行けを出くうくうの峰　有節

布世湖之賦

抑布世湖ハ枝葉之湖の一なり往古大伴宿禰
家持卿國の守ときおはしまし時ハ風景
を賞して和哥を詠し光景を美詩集まとめ
給ふとそいへ共十月の空あらはの間ハ一陽
始含み羅列の花落そこの色たるとへ人々
とともに国山と云処よりるあるいハ中ハ
高にして孤峯ニ立久樹木繁茂ハ地勢福
のよしき項よりものふまてうるに社あり其傍彼の

宮を造り崇め祭りていとそるく覚ぬれいまは
奈の都の風物の眺めをいと行末を東の空
めは松田江の浜い古松長くはえて蒼龍の卧ふ
ひとへ雪踏も遥青海波の鳥潮のみなぎるめる
のとく打寄る白波遠後の後を追すのみて
ゆゑまれて来てこれ君の御かげと浜ひろん
をとも女房をもおもひとれ待る有磯のほとり
法美の江と人家もまばらなる浦をけふねてその
あたりは凡て民俗平常の業二上山のそて千

巌の仏をのこり一渓谷垂姫もまつよ古江の
里を川こそ田子浦波小蓮波巌の山形ふ
おもまりて海も波も通ふ山を狩跳屋
根なのらんと西南神のうしれ若年おふ立山翠
嶽白銀の雪の重沈痛をたるふるすてこれ此
渓の郷はたてう実に月は更級花は吉野を賞て
雪に月の風景を尋ふるふる大年の華と西習つ
へ分れてふ船地の今も一万餘石の田園を奏て
水を流るのところ元百歌千まで流れ来の

国立国会図書館　タイトル『月見集』　請求記号 863-159
ガラス使用

863
159

蕉門御集冊摺物師　湖雲堂
皇都四条通寺町東入南側
近江屋利助

14246

後を海ていのおくとおろのまも五十の歌ちの紀
月の月未ぬきくおもひやふれてやこ脇屋の服を
閑きは都も幸風をうく久月のさくぬる年
強るうれて おうき立諸のやとまを海るみとこ
ふりぬ

波のとくとそるるや泓因の
雲 雅望

有節

14.10.20

国立国会図書館　タイトル『月見集』　請求記号 863-159
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『月見集』 請求記号 863-159

ガラス使用